

鎌倉楽しむ会

令和7年水無月・皇居東御苑の探訪資料

令和7年6月21日

スタート 地下鉄千代田線 大手町C3出口・14:00

〈 平将門公の画像 〉



平将門の乱解説

● 平安時代の中期、荘園制により全国的な開墾が進んでいく事で、次第に朝廷の権威が地方にまで及ばなくなっていく。

都では、藤原氏の権力が欲しいままにしている中、地方政治が疎かになっており、社会全体が無秩序になっていた。

各地で成長していた中小の武士団は、貴族の血筋を引く者を棟梁として、より大きな集団へと成長していった。

9世紀末から10世紀初め、国司と荘園領主の対立や混乱する地方政治の中から、武装する地方豪族や開発領主らが現れた。

彼らは地方に下った^{しんせきこうか}臣籍降下した皇族親王や中・下級貴族を棟梁に、武士団を形成した。その代表格が、桓武天皇から出た桓武平氏と、清和天皇からでた清和源氏である。

寛平元年（889）桓武天皇の曾孫の高望王^{たいらのたかもち}は臣籍降下し、平高望を名乗った。

昌泰元年（898）、高望は上総介に任じられ、長男国香、次男良兼、三男良将を伴って任地に赴く。高望親子は任期が過ぎても帰京せず、自らが開発者となり生産者となることによって勢力を拡大、その権利を守るべく武士団を形成して、その後の高望王流平氏の基礎を固めた。

三男良将の子の将門は成人してから、京に上り、朝廷に中級官人として出仕し、摂関家藤原忠平の従者となっていた。父良将が承平5年（935）急死したため、将門が領地の下総猿島郡（現在の茨城県）に帰郷すると、父の所領の多くが、伯父の国香や叔父の良兼に横領されてしまっていたという。

この相続をめぐる争いが起こり、一族の抗争へと発展していく。抗争を続ける中で、国司とも対立してしまい天慶元年（939）には朝廷に反旗を翻すことになってしまう。秀でた武力を持っていた将門は、常陸、下野、上野、の国府を攻め落とす事に成功した。

瞬く間に関東一円を支配下に収めた将門は、自身を「新皇（しんのう）」と称し、天皇の権威に対抗することを決意する。

これに対し朝廷は、藤原忠文を征夷大将軍に任命し鎮圧に派遣するが、朝廷軍を待たず、下野国の在京官人であった藤原秀郷（ひでさと）、平貞盛（さだもり）の軍勢によって討たれてしまう。

そして、将門の首は平安京に運ばれ七條河原で晒し首となってしまう。

（PC ウェキペディアより抜粋）

① 将門塚



* 重要文化財・将門首塚の由来 *

今を去ること 1500 余年の昔、桓武天皇 5 代の皇胤・鎮守府将軍・平良将の子将門は、下総国に兵を起し、たちまちにして坂東八ヶ国を平定。自ら平新皇（たいらしんのう）と称して政治の革新を図ったが、平貞盛と藤原秀郷の奇襲を受け、馬上陣頭に戦って憤死した。享年 38 才であった。世にこれ「天慶（てんぎょう）の乱」という。

将門の首級は京都に送られ獄門に架けられたが、3 日後、白光を放って東方に飛び去り、武蔵国豊島郡芝崎に落ちた。大地は鳴動し太陽も光を失って暗夜のようになったという。村人は恐怖して塚を築いて埋葬した。これ即ちこの場所であり、将門の首塚と語り伝えられている。

その後も、しばしば将門の怨霊が祟りをなすため、時宗の二祖真教上人は将門に「蓮阿弥陀仏」という法号を追贈し、塚前に板石塔婆を建て、日輪寺に供養し、さらに傍らの神田明神に、その霊を合わせ祀ったので、ようやく将門の霊魂も鎮まり、この地の守護神になったという。

天慶の乱の頃は、平安期中期に当たり、京都では藤原氏が政治を欲しいままにして、我世の春を謳歌していたが、遠い坂東では国々の司が私欲に汲々として善政を忘れ、下僚は収奪に民の膏血をしぼり、加えて洪水や旱魃が相続き、人民は食なく衣なく、その窮状は言語に絶するものがあつた。

そのため、これらの力の弱い多くの人々が、将門に寄せた期待と同情とは極めて大きなものがあつたので、今もって関東地方には数多くの伝説と将門を祀る神社がある。

このことは、将門が歴史上朝敵と呼ばれながら、実は郷土の勇士であつたことを証明しているものである。また天慶の乱は、武士の台頭の烽火（のろし）であると共に、弱きを助け悪を挫く江戸っ子の気風となつて、その影響するところは社会的に極めて大きい。茲にその由来を塚前に記す。

（将門塚の案内板より）

② 震災イチョウ



● 大正 12 年（1923）9 月 1 日関東大震災が発生、東京市中は猛火に吞まれ、この木も表面の一部が炎と高温で変質するも焼失は免れた。しかし周囲の樹木はこの木を除いて、ほぼ全部焼失し、以後「帝都復興のシンボル」として注目を集めた。

もともと、この木は旧・文部省庁舎があつた一ツ橋 1 の 1（現在の毎日新聞本社近く）に植えられていた。植樹は万延元年（1860）ころで樹齢は 160 年くらいとされている。

③ 和氣清麻呂像



● 和氣清麻呂（わけのきよまろ）は奈良時代末期から平安時代初期にかけての貴族です。

神護景雲 3 年（769）に宇佐八幡宮の神官・中臣習宣阿曾麻呂（なかとみのすげのあそまろ）が、宇佐八幡神の神託として、“第 48 代称徳天皇”が寵愛していた「道鏡」を皇位に就かせれば天下泰平になる”

と奏上した。

称徳天皇は、この神託を確認するため、和氣清麻呂を宇佐八幡宮に派遣し事の真偽を確かめさせた。

しかし、先の神託は覆され「天の日継ぎは必ず帝氏をつがしめむ」との神託を受けた。

翌神護景雲4年（770）8月称徳天皇が崩御すると道鏡は失脚し、東国の下野薬師寺（現在の栃木県下野市）に左遷された。

その後、和氣清麻呂は、光仁、桓武天皇に深く信頼され延暦12年（793）には造宮太夫に任じられ、平安遷都を推進し造都に活躍した。この像は昭和15年紀元2600年記念事業として忠臣の象徴として建立された。



④ 平川橋

● 平川橋は慶長19年（1614）に架けられ、しばしば改修が行われて、現在の橋は昭和63年に改架された美しい木橋で、台湾ひのきで、橋脚部と橋台は石、橋桁は鉄骨で長さは29.7m、巾7.82m。欄干にある擬宝珠には慶長期、寛永期の刻印があるものがある。

かつては、この橋は大奥に務める女性たちが頻繁に行き来していたのです。



⑤ 平川門

● 江戸城の勝手口とも言える存在で、大奥の女性の出入口でした。また、徳川御三卿の一橋、田安、清水家もこちらから入城

しました。

三代家光公の乳母の春日局にまつわる話ですが、春日局が外出し門限に遅れたとき、門を守っていた小栗又一郎は規則なので門を開けませんでした。春日局は結局平川門の外で夜を明かしたとのこと。後日この話を聞いた将軍家光公は、職務に忠実と感心したという。

また、不浄門も併設されていて、城内の死人や罪人は、この門から出されました。有名な人物では松の廊下事件の浅野内匠頭や江島生島事件の江島等がいます。



⑥ 梅林坂

● 文明10年（1478）太田道灌公が菅原道真公を祀り、梅樹数百株を植えたので、この名がついたと言われています。現在も梅林坂には本丸方面にかけて50本ほどの梅があり、梅花の時節には手入れの行届いた見事な情景を醸し出し、観梅する人に感動を与えています。この梅の木多くは昭和42年に植えられ、早咲きの品種は12月の冬至のころから咲き始め、例年2月中旬に見頃を迎えます。



⑦ 天守台

● 江戸城の天守閣は慶長11年（1606）の家康公、元和8年（1622）の秀忠公、寛永15年（1638）の家光公と将軍の代替わりごとに築き直され、将軍の権力の象徴であった。家光公の天守は金の鯱を載せた五層の天守閣でした。天守台を除いて高さ

44.84 ㍓ありました。この天守は明暦 3 年（1657）の振袖火事の火災で焼け落ち、翌年には加賀藩前田家の普請により高さ 18 ㍓の花崗岩でできた天守台が築かれます。これが現在残る天守台（東西約 41 ㍓南北約 45 ㍓高さ 11 ㍓）です。

これに天守閣を築く予定でしたが、家光公の異母弟・保科正之は「天守は近世のことにして実は益なく、ただ観望に備ふるのみなり、城下の復興を優先すべきである」と提言し、それ以降は天守閣の再建はされませんでした。



⑧ 竹 林

● 天守台の近くには色々な種類の竹を植えた竹林があります。参考のため主な種類を記してみます。

キンメイモウソウ（金明孟宗竹）

キッコウダケ（亀甲竹）キンメイチク（金明竹）

オウゴンチク（黄金竹）ハウライチク（蓬萊竹）

スハウチク（蘇方竹）ハウショウチク（鳳翔竹）

ラッキョウヤダケ（辣韭矢竹）シハウチク（四方竹）

コンシマダケ（紺縞竹）カンザンチク（寒山竹）

インヨウチク（陰陽竹）



⑨ 石 室

● 抜け穴とか、金蔵とか諸説があるが大奥御納戸の脇という場所柄から、非常の際の大奥用の調度などを納めたところと考えられます。

内部の広さは 20 平方㍓あり、伊豆石（伊豆半島の安山岩）で作られており、天井には長い石の板が使われています。



⑩ 富士見多聞

● 「多聞」とは、防御を兼ねて石垣の上に設けられた長屋造りの倉庫のことで、多聞長屋とも呼ばれていました。

鉄砲や弓矢が納められ、戦時のときには格子窓を開けて狙い撃つことができました。本丸の周囲は櫓と多聞で囲まれ万が一に備えられていました。



⑪ 松の廊下跡

● 元禄 14 年（1701）3 月 14 日赤穂藩主浅野内匠頭公が殿中で吉良上野介義央公への刃傷事件（にんじょうじけん）を起こした場所です。物語は事件発生してから間もなく歌舞伎などで上演され大当たりとなって、現代までも芝居・映画・ドラマには欠かせない題材となっています。

廊下に沿った襖戸に「松」と「千鳥」を主題にした絵が描かれていたことから「松の大廊下」と呼ばれていました。江戸城中で 2 番目に長い廊下で畳敷きの立派なものでした。一番目は「柳の間西廊下」のようでした。



⑫ 富士見櫓

● 富士見櫓は三重の櫓で高さは 16 ㍓あり、どこから見ても同じような形に見えることから「八方正面の櫓」とも呼ばれています。明暦 3 年（1657）の大火で天守閣が焼失し

た後は万治2年（1659）に再建されたと伝えられる重要な建物です。

櫓の上からは富士山はもとより、秩父連山や筑波山、そして将軍が両国の花火や品川の海を眺めたと言われています。

⑬ 中雀門跡



- 御書院門とも呼ばれ、この門を出ると本丸御殿に出ます。

文久3年（1863）の火災で、本丸御殿が焼けた時に類焼し、石垣の表面は熱によりボロボロになっています。現在は石垣だけが残っています。

⑭ 大番所



- 番所とは、警備の詰所のことで、この大番所と同心番所、百人番所の3つが残っています。

中之門の内側に設けられた他の番所より格上で、位の高い与力、同心が詰めて警護にあたっていたところです。本丸入り口の中雀門から下ったところにありました。

⑮ 中之門



- 中雀門と一体となって一つの大きな虎口を作り、百人番所、大番所とともに本丸護衛として重要な役割を果たしていた。

また、石垣は、大名を威圧するのに十分な巨石が使われ、明暦の大火後に熊本藩細川家が瀬戸内海沿岸や紀州半島から運んだ花崗岩で作られている。

⑰ 百人番所



- 江戸城の正門の大手門から本丸に入るとき最大の検問所で、大手三之門の前に設けられている。甲賀組、根来組（ねごろ）、伊賀組、二十五騎組の4組が昼夜交代で護りを固めていた。各組には、同心百人ずつ配備されていたところから百人番所の名が生まれた。

⑰ 同心番所



- 江戸城の正門であった大手門から入城した大名が最初に通る番所で与力、同心が詰めて警備にあたっていたところです。主として登城する大名の供の監視に当たっていた。

⑱ 三の丸尚蔵館



- 三の丸尚蔵館は、皇室に代々受け継がれた絵画、書、工芸品などの美術品類に加え、故秩父宮妃のご遺贈品、故高松宮妃のご遺贈品、三笠宮家のご寄贈品が加わり現在 9,800 点の美術品類を収蔵しています。

⑱ 大手門



- 江戸城の正門で、慶長12年（1607）藤堂高虎によって1年3ヶ月ほどで完成した。

元和6年（1620）江戸城の修復に際し、

伊達政宗などの協力によって、現在のような枅形式の城門になったといわれます。大手の警備は、鉄砲30、弓10、長柄20、持筒2、譜代10万石以上の大名が、これを勤めたそうです。

三百諸侯が威儀を正して登城した門になり、大手下乗門(大手三之門)、大手中の門、中雀門を経て本丸玄関に至りました。



②① 大手門の鯨

● 昭和20年(1945)4月、戦災で焼失した旧大手門渡櫓の屋根に飾られていた鯨です。頭部に「明暦三丁酉(ひのととり)」と刻んでいることから、明暦の大火で消失した後再建された際に製作されたものと推定されます。今の大手門渡櫓は昭和43年(1968)に再建されたものです。



②①和田倉噴水公園

● 昭和36年天皇皇后陛下ご成婚を記念して作られ、その後平成7年皇太子殿下のご成婚を記念して高さ8.5m吹き上がる大噴水を整備し新しく造られました。江戸時代は会津藩上屋敷(2728坪)でした。

＊ 豆知識 ＊

＊下馬評の語源について＊

● 大名や旗本の本丸登城には、おもに大手門が使われた。門前には「下馬」と記した立て札が立っていた。下馬より先は、大名や役高500石以上の役人・高家・交代寄合などの「乗輿以上」の格をもった者以外は、馬や乗り物(駕籠)から降りなければならなかった。

さらに、大手三之門を「下乗」と称した。ここでは御三家、日光門主など以外は乗り物から降りなければならず、供連れも大名で4~5人、諸役人で3~4人と制限された。御三家もつぎの中之門では乗り物を降りて徒歩となった。

そして、本丸御殿のなかへは大名、諸役人本人しか入ることはできなかったのである。

多くの大名は、下馬まで多数の家臣とともに登城しても、その大半を下馬先で待たせることになり、一斉登城の際の下馬先は、その家臣たちであふれかえったという。

ここでは、主君の帰りを待つ家臣たちの間で、幕府内での出世についていろいろ取り沙汰されたことから、「下馬評」という言葉が生まれ、現在でも「出世予測」という意味に使われている。

＊太田道灌＊

室町中期の武将・歌人扇谷(おおぎがやつ)上杉定正の臣。名は資長。俗に持資(もちすけ)江戸城(1457)を築くなど築城・兵法に長じ、学問・文事を好んだ。定正に謀殺された。(1432~1486)

参考資料 江戸博覧強記、角川日本史辞典
千代田区観光協会資料、東御苑観光ガイド資料、PCウィキペディア

完

